

ルターの宗教改革 Reformation

1) カトリック教会のあり方に対する根本的批判は、既に14世紀に始まっており、No.66 B面に記したように、ウィクリフ（イギリス）、フス（ボヘミア）、サヴォナローラ（フィレンツェ）などの命をかけた批判にもかかわらず、コンスタンツ公会議 ※ 1414-18 以降も有効な教会改革は行われることはなかった。ルネサンスの中で、エラスムスのようにキリスト教人文主義者の中には聖書研究を深めて教会の腐敗を批判する者もいた。【1: 】の失敗などにより教皇の権威は衰え、聖職者の中からも教皇庁批判と改革の声が上がり、世俗の支配者たちもこれを支援したので、宗教界は大きな転機を迎えた。

※ コンスタンツ公会議 1414-18 = **教会大分裂**を解決、フスの焚刑、教会改革などを決定。招集したのは神聖ローマ皇帝ジギスムント 位1411-37 10K

2) メディチ家出身の教皇【2: 】位1513-21 LeoX はサン=ピエトロ大聖堂 (No.96 B面) 改築の資金調達という名目で、「ローマの牝牛」であるドイツにおける※【3: 】しょくゆうじょうの販売を許可した。ローマ教皇のドイツでの贖宥状発売を引き受け、実際に「免償説教師」を村々に派遣したのはブランデンブルク選帝侯の子のアルブレヒトであった。アルブレヒトは1514年にマインツ大司教に選任されたが、その時ローマ教皇に納める金をフッガー家から借金しており、その返済に迫られていた。「免償説教師」にはフッガー家の番頭が付き添い、売り上げの半分はローマ教皇のもとに送られ、半分はフッガー家のものとなる約束だった。「免償説教師」は「**金銭が献金箱の中へ投げ入れられてちゃりんと鳴るやいなや、魂は(煉獄から)飛び出す**」などと言葉巧みに人々の購買欲をかきたてた。ルターが憤慨したのも無理はない。

漢字チェック：**贖宥状**

※ドイツ人が「ローマの牝牛めすうし」と言われたのはなぜ?・・・当時、イギリス、フランスなどは国家統一が進み、教会の所領に対しても国王は課税権を主張するようになっており、ローマ教皇はかつてのようにはたやすく資金を集めることはできなかった。ドイツでは、神聖ローマ帝国皇帝の支配は形だけで、多くの領邦(ラント)に分裂していた。世俗諸侯の領邦だけではなく、大司教や司教などの聖職者の所領も多く、それらはローマ教会の基盤であった。**分裂状態のドイツはローマ教皇の搾取の絶好のターゲットに**されていた! 牝牛ではミルクを搾れない。

16世紀にルネサンスの中心地がローマに移り、ローマ教皇はその保護者としての出費を必要とするようになった。教皇レオ10世は、サン=ピエトロ大聖堂の改築のためにドイツに目をつけ、教会領への課税を強めるとともに、贖宥状の発売などで農民からお金を巻き上げた。1517年にルターが宗教改革の烽火を上げると、ドイツの農民が熱心にルターを支持したのは、このような背景があったからである。

3) 1517年、ヴィッテンベルク大学神学教授【4: 】1483-1546 Martin Ruther は、ローマ教皇の許可した【3】販売に疑問を投げかける【5: 】を発表した。これを起点とする一連のカトリックへの批判・改革運動の総称を【6: 】(Reformation)と呼ぶ。ただし、**ルターは1517年の時点では、教会を否定するつもりも教皇と対立するつもりもなかった。**

絵画名称不明。このようなリュートを弾くルターの姿は、後世(17世紀以降)よく描かれた。なお、ルターは苦学生の間、街頭でリュートを弾きながら歌い、学費を稼いでいたと言われている。

リュートを弾くルター

『九十五カ条の論題』は、一般庶民には読めないラテン語で書かれ、ヴィッテンベルク教会の木の門扉に貼り付けるという方法で発表された。これは当時の神学論争ではごく普通の方法だった。この文章はドイツ語に訳され活版印刷されて全ドイツに広まった。この門扉は1760年に焼失した。贖宥状の販売の背景には、《教会への喜捨などの善行を積み、その功績によって過去におかした罪も赦される》(山川出版社『詳説世界史』p209)という認識がある。これが正しいかどうかは、神学上の非常に根源的な問題である。

これについてルターは、《**金銭、善行、儀式によっては魂の救済はできない! 魂の救済は「悔い改め」と福音への信仰によってのみ行われる**》と考えた。これを、「【7: 】」しんこうぎにんせつという。『九十五カ条の論題』は、この論題について純粋に神学上の論争として、公開の場での討論を呼びかけるものだった。

「人は信仰によってのみ義 ※ とされる」という信仰義認説はルターのオリジナルではない。その初出は、なんと使徒パウロ ?-AD60以降の神学であり、ローマ末期最大の教父**アウグスティヌス (354-430)**に受け継がれ、ルターに至った。

※キリスト教における義(もちろんこれは日本語訳)は、義(ただ)しいという意味。真に義であるのは神のみだが、人間は神を信じることに於いて義(ただ)しさに近づくことはできる。ここまでは従来の説と同じ。ルターは人が行動において義とされること(行為義認)を否定し、信仰によってのみ人が義とされる(信仰義認)と考え、それまでのキリスト教で行われていた苦行、断食などを否定した。だから贖宥状を購入する行為は、義とされることなどありえない。

一般に、当時のキリスト教では罪はこのように許される。①《罪を自覚し反省する》→②《聖職者に告戒する》→③《許しを得た後、罪の償いをする》この③の償いを軽減する行為が贖宥である。十字軍に従軍する兵士に贖宥を行ったのが起源とされる。「免罪符」は、いかに酷い誤訳であるか分かるだろう。

ルターは贖宥自体を否定したのではなく、上記①②を飛ばして贖宥状の購入で罪が許されるなどということは神学上あり得ないと考えそれを率直に述べた。これが全ヨーロッパを動かす影響力を持つとは本人も思っていなかったであろう。

なお、贖宥状の販売はトリエント公会議 1545-63 の決議で禁止されたが、贖宥状の発行自体は禁止されなかった。

4) ルターは、1519年、ローマ教皇の差し向けた論客エックとライブツィヒで公開討論した。エックの巧みな誘導で「フスの信条のなかに、あきらかにキリスト的で福音的なものを、私はたくさん見つけた」「公会議も誤ることがある」などと述べてしまう。このころにはルターは決意を固めていた。「信仰のよりどころは【8: 】である」として、**教皇権や教会**

組織を全面的に否定した。なお、ルターの「聖書のみ」(聖書中心主義)の原理は福音主義とも呼ばれ、新教の共通項となっていく。

1520年、ルターがあいついで発表した3つの文書は非常に重要で、ルターの方向性を確定した。

- ①『ドイツ貴族に与える書』……教会の聖職位階制度を否定した。
 - ②『教会のバビロニア捕囚』……聖書に根拠のない秘跡や慣習を否定した。
 - ③『キリスト者の自由』……人間が制度や行いによってでなく信仰によってのみ義とされるという彼の持論(信仰義認説)が聖書を引用しながら主張されている。
- ルターの主張が、活版印刷※や版画によってドイツ各地に伝えられると、ローマ教皇の搾取に反発する諸侯や市民、農民など、広範な人々が彼を支持した。

※グーテンベルクは1445年頃に活版印刷術を発明、1455年に世界で初めて「グーテンベルク聖書」(『旧約聖書』と『新約聖書』)を印刷したが、それは庶民には読めないラテン語版だった。彼は生活のために贖宥状の印刷まで行なった。

5) レオ10世は回勅『エクスルゲ・ドミネ』(主よ、立ってください)を發布して自説を撤回しなければ破門すると警告したが、ルターは、1520年12月に回勅と教会文書をヴィッテンベルク市民の面前で焼き捨てた。ルターは1521年の回勅『デチュート・ロマヌム・ポンティフィチェム』(ローマ教皇として)によって1521年1月3日付で正式に破門された。

6) 教皇レオ10世の盟友である【9: カール5世(=スペイン国王カルロス1世 位1516-56)は1521年4月、既に破門されているにもかかわらずルターをヴォルムス帝国議会(神聖ローマ帝国の議会)に呼び出し、自説の撤回を迫った※。1521年4月17日、「私は教皇と公会議の権威は認めません。なぜなら、それらは互いに矛盾しているからです。・・私の良心は神の御言葉(みことば)にとらわれているのです。私は何も取り消すことができないし、取り消そうとも思わない。なぜなら、良心にそむくことは正しくないし、安全でもないからです。これよりほかに私はどうすることもできない。ここに私は立つ。神よ、私を助けたまえ。アーメン。」と述べてルターはこれを拒否したため、【10:

】を失ったが、ザクセン選帝侯フリードリヒ(3世) 位1486-1525 Friedrich der Weise von Sachsenの居城、ヴァルトブルク城に保護された。『新約聖書』を古典ギリシア語からドイツ語訳する作業は1521~1522年、同城内で完成した。一部に誤訳もあるが、聖書中心主義をとるルター最大の功績とされている。近代ドイツ語の確立にも貢献した。また複数の専門家から助言をうけて『旧約聖書』もヘブライ語からドイツ語訳している。なお、『新約聖書』のドイツ語版はルター以前にも存在した。

※ルターがヴォルムス帝国議会の場で破門されたかのように描いている作品もあるがそれは不正確。同議会が結論を出す前にルターはヴォルムスを脱出、ヴァルトブルク城に逃げ込んで処刑を免れた。

《このころのドイツ》

神聖ローマ皇帝 カール5世	対 立	◇諸侯 ◇諸侯 ◇諸侯 ◇諸侯	ドイツは300以上もの領邦国家がそれぞれ中央集権化をすすめていた。有力諸侯はルターを支持した。
------------------	--------	--------------------------	---

なぜ、プロテスタント protestant と言うのか? 皇帝は一時、イタリア戦争 1494-1559 に諸侯の協力が必要なためルター一派を認めた(1526)が、3年後(1529)に撤回し、弾圧を再開した。ルター派はこれに抗議した。これが【11:

】の語源! 従って、狭義のプロテスタントとはルター派を指す。しかし今日では、ルター派に限らず、カルヴァン派、イギリス国教会を含む新教徒の総称である。

- 7) 1523年、【12: 1484-1531 Zwingli も、スイスのチューリヒで贖宥状の販売を批判し改革運動を起こした。彼は公開討論会を開き、市民の納得を得ながら改革を進めた。しかし、ルターには協力を拒絶された。その主張の一部はカルヴァン派に取り入れられた。
- 8) 教会の腐敗や教皇への神学的な批判から始まったこの改革は、皇帝や君主をまきこむ一大政治問題へ発展し、教皇と皇帝の権威を大きく動揺させ、折しもイタリア戦争を契機に形成されつつあった主権国家体制を強める結果となったのである。主権国家体制の確立については別項で扱う。
- 9) ドイツ農民戦争(1524-25)に対するルターの態度は、No.101で学ぶ。

参考資料 ルター『九十五カ条の提題』(抜粋) 抄訳=山内貞男 多くの教科書は「九十五カ条の論題」としている。

真理を明らかにしたいという愛と熱意から、ヴィッテンベルクにおいて、当地の教養学と神学の修士でありまたその正教授であるマルティン・ルター師の司会のもと、下記の事柄が討論されることを求める。それゆえ、出席して口頭でわれわれと議論することのできない者には、不在者として文書でそうするようにお願いする次第である。われわれの主イエス・キリストの御名(みな)において。アーメン。
1. われわれの主であり師であるイエス・キリストは、「悔い改めよ」などと言われたことによって、信徒の全生涯が悔い改めであることを求められたのである。/2. この言葉は、秘跡としての悔い改め[悔悛]についてのもの一すなわち司祭の職務によって執り行われる告解と贖罪(しよくざい)についてのものと理解することはできない。/中略/6. 教皇は、赦しが神によることを宣言しそして認証する場合を、あるいは少なくとも教皇自身に保留された事項を赦す場合を除いては、どのような罪も赦すことができない。このことを軽視すれば、罪はそのままそっくり残るであろう。/中略/20. それゆえ教皇は、「すべての罰の完全な赦し」ということで、単純にすべての罰そのものではなく、ただ教皇自身が課した罰のことだけを考えているのである。/21. それゆえに、教皇の免償によって人間はあらゆる罰から解放されて救われると言う免償説教師はまちがっている。/22. それどころか免償説教師は、煉獄にいる魂がこの世で教会法の規定にしたがって受けなければならないかあったであろう罰を、ただのひとつも赦すことはない。/27. 金銭が献金箱の中へ投げ入れられてちやりんとう鳴るやいなや、魂は(煉獄から)飛び出すと言う人たちは、人間[の教え]を説教している。/28. 献金箱の中へ投げ入れられてちやりんとう鳴る金銭で、利益と強欲が大きくなり得ることは確かである。ところが、教会の代願の祈り[が成就するかどうか]はただ神一人のご意志による。/35. 金銭で魂を[煉獄から]解放しようとしたらあるいは告解証を得ようとしたりする人には痛悔が必要ではない、と教える者は、非キリスト教的なことを説教している。/36. 真に痛悔したキリスト教徒はだれでも、免償状[免償証]がなくともその人自身にふさわしい、罰と罪の完全な赦しを得ている。/37. 真のキリスト教徒はだれでも、生きていてる者であれ死んでいる者であれ、免償状がなくとも彼自身への神からの賜物として、キリストと教会のすべての財宝に与(あず)かっている。/中略/45. 貧窮者を見てもこれを無視しながら、免償のためには金銭を払う人は、教皇の免償状ではなくて、神の不興を買うことを、キリスト教徒に教えなければならない。/以下割愛